

てわからないようにしたものである。米軍が監視に来るといつて、教師たちは、児童に徹底的に黒塗りにさせていた。教科書は修身（戦前の道德）・国史・地理の学科の指導に大変化をきたした。従来の考え方とはまったく異なる指導になつて混乱した。

物がない

当時の物資不足を『高田町誌』で見れば、統制によつて日用品の多くが不足し、衣類などは隣組を通じて一・二点配給されるのを血眼で奪い合つたといふ。国旗が裏地に使われ、味噌・醤油もない。煙草も配給では間に合わず草の葉を乾燥させて吸い、南瓜、イモ類もなく空腹を満たすどころか飢えをしのぐのがやつとだつたといふ。

この頃、米と物との交換が盛んに行われている。一例を挙げると、皿十枚に米二升、茶碗十ヶに米三升、傘一本に米三升、大人ゴム長靴一足に米一斗、青木木綿縞一反に米1俵となつてゐる。冬の雪道でもゴム長靴など夢のまた夢、藁で編んだ深靴を履いて登校する。帰路は中敷きの藁がグチャグチャになつて足が凍てつき、痺れて感覚が麻痺する日々であつた。昭和十七年（一九三二）農業生産統制となり、十八年には食糧自給体制強化対策が打ち出された。農村は自分の農業生産さえ自由に処理することができなくなつて供出・配給制となつた。

【『藤川小学校閉校記念誌』より転載】

時代を反映し、子供たちは軍人になることを夢見るようになつてゐた。教科書には数多く軍隊に関連する写真やイラスト、記述が見られる。この頃、旭村から九人が満蒙開拓青少年（十五～十九歳）に選ばれています。子供たちの服装の大半は、綿花から全て手づくりの着物にモンペ姿、履物は藁草履か下駄、藁靴の深靴といつた按配で、洋服は少なく、良家の子女のものといつた印象だつた。
学用品は風呂敷に包んで登下校した。

子供たちの多くは、農繁期ともなると学校を欠席しがちで、特に高等科や青年学校の子供たちは家の手伝いのために欠席が多かつた。そのため小学生にも農繁（農桑）休業が高学年三週間、低学年二週間が与えられ、家の農作業手伝いをした。

昭和十二年（一九三七）、日中戦争となり、もはや戻り出来ない状態に立ち至つた。

旭書学校の戦中・戦後

昭和に入ると世界的な経済恐慌に活路を見い出すために、次第に戦地色の強い時代へと進んでいった。尋常小学校一年生「読本」にある『ハナ、ハト、マメ』に続く『ススメ ススメ ヘイタイ ススメ』がそれを端的に現している。

昭和三年（一九二八）には、校舎増築、校舎拡張があり、住所地が大字館端字田中四五五番地に表示変更された。

時代を反映し、子供たちは軍人になることを夢見るようになつてゐた。教科書には数多く軍隊に関連する写真やイラスト、記述が見られる。この頃、旭村から九人が満蒙開拓青少年（十五～十九歳）に選ばれています。子供たちの服装の大半は、綿花から全て手づくりの着物にモンペ姿、履物は藁草履か下駄、藁靴の深靴といつた按配で、洋服は少なく、良家の子女のものといつた印象だつた。